

2026 年 10 月 4 日（聖霊降臨後第 19 主日、A 年特定 22）

メッセージ

「その財産を手に入れよう」

（マタイによる福音書 21: 33-46）

司祭ヨセフ太田信三

先週に続き、今日の福音でも、主イエスは祭司長たちに語りかけます。今、この福音書を読むわたしたちには、殺された息子が主イエスを指していると分かります。けれども、このたとえを、わたしたち自身にも向けられた言葉として聞いているのでしょうか。

農夫たちは、主人の送った僕たちに繰り返し暴力を振るい、ついには息子に手をかけます。「さあ、殺して、その財産を手に入れよう。」息子なら敬ってくれるだろうという主人の期待は、完全に裏切られます。人は不安や恐れから逃れるために、他者から奪ってでも安心を得ようとする場合があります。はじめは「少しならば」と、人よりも多くを得ようとする。しかし気が付けば、「まだ足りない、まだ足りない」と、さらに奪おうとする。そのことが、農夫たちの暴力がエスカレートすることに表されています。心が徐々に麻痺してしまうのです。そしてその思いが、わたしたちの生きる「奪い合う」世界をつくっています。

しかし、他者を顧みず、自分の安心だけを求めても、かえって人とのつながりを失ってしまいます。だからこそ、わたしたちは礼拝のたびに唱えます。「すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主に捧げたのです。」他者の命も、自分の命も、神さまのものだからこそ、大切にできるのです。日々いただく糧も神さまからの賜物です。それぞれに与えられたものを持ち寄り、分かち合うことで、豊かな実りがもたらされます。

けれども、「自分のものにしたい」という思いは強力です。礼拝で「すべてのものは主の賜物」と唱えていても、日々の暮らしでは、わたしたちも奪い合う思いに引き寄せられてしまうのです。主イエスは、そういうわたしたちのために十字架にかかってくださいました。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。」隅の親石は、建物の隅に据える土台の要となる石です。最も尊い方が、両腕を広げて十字架に上り、すべてを手放し、ご自分の命を与えてくださいました。このようにご自分を与え尽くされた主イエスこそが、今もわたしたちを支える隅の親石なのです。

わたしたちは、自分の欲望や過ちに、なかなか気付けません。そのわたしたちをも、十字架の主イエスは見捨てず、支えてくださいます。その主イエスに支えられ、十字架のお姿を見つめるうちに、他者から奪ってでも自分のものにしたいというおごりは打ち砕かれ、握りしめていた手が開かれていきます。ご自分を与えてくださる主イエスがわたしたちの土台であるからこそ、わたしたちも、分かち合い、与え合う者へと変えられていくのです。

「すべてのものは主の賜物」であることに立ち帰りましょう。隅の親石である主イエスに支えられて、わたしたちも手を開き、与え合う者として、この奪い合う世界へと派遣されていきましょう。